

保育現場で求められる幼児体育に関する考察 ～リズム体操に着目して～

Consideration on Physical Education for Infants Required in Childcare Site ～ Focusing on Rhythmic Calisthenics ～

赤堀達也
Tatsuya AKAHORI

旭川大学短期大学部幼児教育学科

Abstract

In this study, we consider rhythmic calisthenics in infant physical education. It is a rhythmic calisthenics that is not an exaggeration to say that it is a synonym for childcare, but it has not been studied much for junior high school dance compulsory that was announced in 2008, and how it is handled in the field. Therefore, we will investigate and consider what kind of rhythmic calisthenics are being practiced in kindergartens in Tokyo, Kanagawa Prefecture and Shizuoka Prefecture, centering on the city center, and reflect the results in the training of nurseries in Hokkaido. Aimed.

As a result, there were few gardens that did rhythmic calisthenics against expectations. As the city approached, the number of rhythmic calisthenics decreased. In the field, rhythmic calisthenics such as traditional calisthenics are still practiced, but there is also a tendency to seek new rhythmic calisthenics. It became clear that it was necessary to deal with new rhythmic calisthenics as well as the traditional rhythmic calisthenics at a nursery school.

抄録

本研究では、幼児体育におけるリズム体操について考察する。保育の代名詞と言っても過言でないリズム体操だが、平成20年に告示された中学校ダンス必修化の割には、あまり研究がなされておらず、現場でどのように扱われているのかつかめていない。そのため、都心を中心とした東京都・神奈川県・静岡県の幼稚園でどのようなリズム体操が行われているのかを調査・考察し、その結果を北海道の保育者養成に反映していくことを目的とした。

その結果、予想に反してリズム体操を行っている園が少なかった。また都心に近づくにつれてリズム体操を行っている園が減少していった。そして現場では、昔からあるリズム体操が現在でも根強く行われている一方で、新しいリズム体操を求めている傾向も見られた。保育者養成校において、これまでのリズム体操だけでなく、新しいリズム体操を取り扱っていく必要があることがわかった。

I. 緒言

1. 研究の背景

以前、実習生から実習先の保育者に「学校でリズム体操は習っていないのか？」と言われたと聞いたことがある。この実習先の保育者の真意はわからないが、学校でもリズム体操を行っていたため、実習先で望んでいたリズム体操ではなかったか、実習生が行う勇気がなかったかのどちらかではないかと考えられる。そのため、保育者養成校では現場で求められているものを伝え、指導していく必要がある。現場で求められるリズム体操について調査し、保育者養成にいかす必要があると思い、この研究を行うことにした。

2. 中学校におけるダンス必修化について

文部科学省では、「平成20年3月28日に中学校学習指導要領の改訂を告示し、新学習指導要領では中学校保健体育において、武道・ダンスを含めたすべての領域を必修とすることとしました。」¹⁾とある。前回の学習指導要領の改訂により必修化されているダンスに繋がる幼少期からの一貫した取り組みとして、リズム体操をしっかりと考えていくべきである。しかし、そこまで意識的な取り組みはない。これからダンスを全員が行っていく未来があるものとして、そこに繋げるためのリズム体操として捉えていく必要を感じた。

3. リズム体操に期待すること

リズム体操は、子どもたちに体を動かすことの楽しさを伝えることができる、保育の代名詞と言っても過言ではない教材である。特に子どもの体力低下が社会問題となっている現代では、子どもたちが公園に集まっても、広場や遊具で体を動かして遊ぶよりかは、ゲーム機を手にとってベンチで座って遊んでいる姿が多くみられる。これでは子どもの体力低下問題はなかなか解決していかないであろう。スポーツ庁「平成20年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果」²⁾によると「運動時間による体力差は明らかになった。」とある。運動時間が多

い子どもほど体力テストの値が良く、運動時間が短い子どもほど体力テストの値も悪くなるということがわかっている。そのため少しでも多く体を動かすように子どもたちへと促していくことが必要であると考えられる。

そのため、園でリズム体操を積極的に取り入れ、体を動かすことの楽しさや爽快感を子どもたちに伝え、子どもたちの運動や運動遊びに対する取り組みを変えていきたい。

また実習時において、リズム体操を積極的に行えるのであれば、子どもたちにとって楽しく盛り上がる設定保育となるであろうし、そのような設定保育ができれば実習生の自信にもつながるであろうし、またなにより一つの保育技術の獲得につながる。

そのため、現場ではどのようなリズム体操を求められているのかを調査・考察し、学生たちに実践に即した指導につながるよう、保育者養成校の授業に反映していくことを目的として研究することにした。

II. 調査方法

神奈川県横浜市の保育者養成校であるA専門学校において、B短期大学の幼稚園教諭二種を併修している学生に対し、2016年6月に2週間の幼稚園実習に行ったのちに、実習先の幼稚園でのリズム体操の取り組みについてアンケートを行った。アンケートに答えた学生は218人、実習園は東京都13園・神奈川県181園・静岡県11園・その他（不明を含む）13園であった。

また同一園に実習に行っている実習生もいるが、異なるクラスに入るため別として数えることにした。

III. 調査結果

アンケートを行った結果、リズム体操の他にも、創作ダンス・盆踊り・フォークダンス・ヒップホップといった様々な種類のダンスが行われていた。しかし、いずれかの種類のリズム体操やダンス等を取り入れている園は218園中130園に留まり、59.6%の園でしか取り込まれていなかった。

保育現場で求められる幼児体育に関する考察
～リズム体操に着目して～

今回は子どもの運動に対する肯定感を高めることにつながる研究としたいため、日常的に行うことができるリズム体操の取り組みについて調査することにした。そのため、盆踊り・フォークダンス・運動会用創作ダンス等といったような納涼祭・お泊り保育・運動会の時期に限定される踊り・ダンスについては除外することと

した。そして一年を通じていつでも行うことができるリズム体操やヒップホップをリズム体操として括り、集計することにした。そして、今回アンケートに記載されたリズム体操のタイトルとそれを取り入れている園数を表1にまとめた。

表1 リズム体操のタイトルと取り入れている園数

題 目	園数	題 目	園数
ディズニーたいそう	30	元気もりもり	1
エビカニクス	16	ケンケンパ体操	1
アンパンマンたいそう	13	昆虫体操	1
たけのこ体操	8	サンサンたいそう	1
いっとうしょう体操	5	だいだいだいけんぼう	1
はとぼっぼ体操	4	太陽のまつり	1
ラジオ体操	4	だるまさんがおどった	1
アブラハムたいそう	3	ダンゴムシダンス	1
カエルの体操	3	チェッコリー	1
かっぱなにさまかっぱさま	3	チュンチュンワールド	1
もったいなばあさん	3	ドラえもんたいそう	1
妖怪たいそう第一	3	なんでやねんの体操	1
お天気エネルギー	2	忍者	1
おどるポンポコリン	2	ハイタッチ	1
げんきつき体操	2	バス	1
とんがり体操	2	バナナ体操	1
どうぶつたいそう1・2・3	2	バナナロケット体操	1
パイナポー体操	2	パパは遊園地	1
秘伝ラーメン体操	2	ペンギン体操	1
あいうえお体操	1	ホ、ホ、ホ	1
あさごはんマーチ	1	ぼっぼ体操	1
いつだってVサイン	1	ミートザワールド	1
うんとこどっこいしょ体操	1	南の島のハメハメハ大王	1
Oh!スージー	1	ミックスジュース	1
おじぞうさん	1	虫歯体操	1
おたまじゃくしの体操	1	虫の体操	1
おはよう体操	1	モグラ体操	1
キッズ体操	1	もずくダンス	1
きのこダンス	1	らっせーら	1
キューピー体操	1	ロケット花火体操	1
グーパーダンス	1	タイトル不明	2

前記で定義したリズム体操に限定して集計してみると、リズム体操に取り組んでいる園は218園中104園であり、47.7%にしかならなかった。これは実習生が2週間しか実習に入らなかったからとも考えられるが、保育の現場にリズム体操は思っているほど日常の保育に取り込ま

れていないことがうかがえた。

次にデータが集まった各都県、東京都・神奈川県・静岡県において、各都県別のリズム体操を取り入れている園の割合を表2にまとめた。また神奈川県においては横浜地区とその他の地区と分けて集計もした。

表2 各都県におけるリズム体操を取り入れている園の割合

都県	リズム体操を取り入れている割合	
東京都 (n=13)	46.2%	
神奈川県 (n=181)	47.5%	横浜 (n=80) 43.8%
		その他 (n=101) 50.5%
静岡県 (n=11)	54.5%	

表2の通り、静岡県から神奈川県を経て東京都へと、都心に向かうにつれ、リズム体操が行われる割合が減少していることがわかった。また神奈川県内においても、最も栄えている横浜とその他の地域では、リズム体操の取り組みに大きな差が見られ、都県の傾向と同様に、栄えている地域の方が低くなることがわかった。新しい事例や取り組みは、東京や栄えている場所から始まり、徐々に地方へと普及していく傾向にある。そのためこのアンケート結果から、以

前はもっと多くの園でリズム体操が行われていたことが推測でき、また今後においてリズム体操が日常の保育から更に減少していく懸念が見受けられた。

いずれかのリズム体操行われていた104園では表1で示したように、タイトルが不明なものを除き61種類のリズム体操が取り組まれている。このうち多く取り組まれているリズム体操の上位をピックアップし、その発表年と経過年数を表3にまとめた。

表3 現場で取り上げられているリズム体操の上位7つとそれらの発表年³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾

	曲名	園数	発表年	経過年数
1	No.1 体操 (ディズニー体操)	30 園	1986 年	33 年
2	エビカニクス	16 園	2002 年	17 年
3	アンパンマンたいそう	13 園	1993 年	26 年
4	たけのこ体操	8 園	1972 年	47 年
5	いっとうしょう体操	5 園	1989 年	30 年
6	はとぼっぼ体操	4 園	1941 年	78 年
6	ラジオ体操	4 園	1931 年	88 年

※「経過年数」は2019年現在

この上位7つのリズム体操は、リズム体操に取り組んでいる104園のうち62園で行われており、59.6%という高い確率で行われていた。これらの曲の発表年に着目すると、エビカニクス

以外は四半世紀～半世紀以上に発表され、長年に渡り行われているリズム体操であることがわかる。そのため、これらは今後も行われていくことが予想される。保育者養成校では、これ

保育現場で求められる幼児体育に関する考察
～リズム体操に着目して～

らのリズム体操を中心に踊れるようにしておくと、実習に行った際や就職した際に困ることがないと推測される。保育者養成校においては、これらのリズム体操を準備しておくことがわかった。

またこれとは反対に1園もしくは2園でしか行われていないリズム体操にも目を向けてみた。全61種類中48種類、つまり80.3%が1園もしくは2園でしか行われていないものであった。現場の先生が自分でリズム体操を自らネット等で探して行っていると推測できる。このことから、現場では新しいリズム体操を求めているが、新しいものが入って来ないもしくは来にくい状態となっていると推測できる。

IV. 考察

1. 幼児体育系教員の性別の視点から

保育の代名詞と言っても過言ではないリズム体操であるが、実際に取り組んでいる園が半数にも満たないことが分かった。しかも今後、減

少していく懸念があることがわかった。ダンスが必修化してから10年が経過したが、幼児体育において、子どもの将来を見越した授業展開がなされていない可能性が出てきた。保育者養成校として考えていく必要がある。保育者養成校において、男性が幼児体育系の授業を行う場合、リズム体操は取り上げられていないことが多い。ダンス必修化以前の学校体育で教育を受けてきた教員たちにおいてダンスやリズム体操は抵抗が有るようだ。そんなところにも課題があるように見られる可能性がある。

そこで、神奈川県保育士及び幼稚園の両方の免許を取得可能な保育者養成校において、幼児体育系の専任教員の男女の割合を調べ表4にまとめてみた。2019年10月から12月において各学校のホームページにて調査する方法をとった。また北海道においても同様の手口で調査し比較してみた。ただし掲載のなかったものや専任教員が不在のもの以外で集計した。

表4 幼児体育系教員の男女の割合

	神奈川県			北海道 (n=11)
	県内全域 (n=17)	横浜市 (n=7)	その他 (n=10)	
男性教員	52.9%	57.1%	50.0%	54.5%
女性教員	47.1%	42.9%	50.0%	45.5%

※専任教員以外（非常勤講師等）や記載のなかったものについては除いて集計した。

神奈川県において、リズム体操が行われている割合が比較的低い都会の地域である横浜市と、リズム体操が行われている割合が比較的高い都会ではない地域であるその他で、幼児体育系の授業を行っている教員の男女の割合を調べてみると、横浜市の男性教員の割合が高く、その他の地域では男女の割合が同じだった。教員の異動等もあるため一概に言い切れないところもあるが、教員の性別の割合とリズム体操の行われている割合に関する可能性がある。つまり幼児体育系の授業において、教員の性別により授業内容が変わり、地域の園のリズム体操の普及が左右されている可能性がある。

ちなみに、北海道の男女教員の割合は、神奈川県全域の数値ととても似た数字となっている。そのため静岡・神奈川・東京の関係のように、今後北海道におけるリズム体操も徐々に行われなくなっていく懸念が示された。

2. 保育者養成校で取り上げたいリズム体操について

保育現場ではこれまで昔から多くの園で行われてきている7つのリズム体操が多く行われていた。そのほとんどが四半世紀に渡り長く行われていることから、今後も引き続き保育の現場で行われていくことが推測される。そのため、

授業で取り上げるようにした方がいいと考えられる。改めて調査する必要はあるが、それは北海道においても同様ではないかと推測できる。

また、一園や二園でしか行われていないリズム体操が多かったことから、これらのリズム体操とは別の新しいリズム体操を求めている現場の様子が見られた。各園でバラバラに取り組まれていることから、待遇が低い上にハードワークを強いられている現場の保育者たちが、時間の合間を縫って新しいリズム体操を探していることを示しており、つまり研究を専門とする大学・短期大学から発信されたものではないことを暗に意味していると考えられる。この現象は、保育者養成校でのリズム体操への取り組みを考えていくべきであるとも受け取れる。保育者養成校で新しいリズム体操に取り組んでいるのであれば、もう少しまとまった数字が出てきてもいいはずである。しかしそうなっていないということは、保育者養成校でいつまでも昔の7つのリズム体操を行っているだけか、もしくはそれすらもあまり行っておらずに、卒業生が園に就職してから先輩保育者たちから教わっているかのどちらかであると言える。そのため、保育者養成校でそのような取り組みがなされていくべきである。

過去には、2011年にはドラマ「マルモのおきて」の主題歌である「マル・マル・モリ・モリ！」や、また2014年にはテレビアニメ「妖怪ウォッチ！」のエンディングテーマ曲である「ようかい体操第一」が流行したが、現在は下火となっている。ドラマやアニメはその時期には取り上げられやすいが、長く続けていると流行遅れと思われることもあり、長く続けるにくいようである。NHKや長期で継続されている子ども向け教育番組系か、もしくは教育者・研究者が作成したものが現場で長く続けやすいようである。その流れからすると現在流行している「2020応援ソングプロジェクト」として制作されたFoorinの「パブリカ」は今後長く親しまれる可能性が高い。また幼児体育に携わっている教育者・研究者から制作・発信されたものは長期に渡って使用しやすいであろう。

北海道においては平成27～29年度文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の助成を受けて実施された「北海道における子どもの体力・運動能力向上のためのリズム体操開発の報告」⁸⁾で開発されたリズム体操「道民体操(どさんこ体操)」,「はっちゃき体操」などが北翔大学の教員により報告された。このような取り組みは現場の保育者にとって、とてもニーズに応えた研究である。このような研究が全国的に行われていくべきであることがわかった。

3. 子どもの体力の観点から

子どもの体力低下が長年社会問題となっているが、現在では運動する子どもと運動をしない子どもの体力差が拡大している二極化が言われている。スポーツ庁の「平成30年度体力・運動能力調査結果の概要及び報告書について」⁹⁾よりの「幼児期に外遊びをよくしていた児童は、日常的に運動し、体力も高い」と記されている。つまり、これは幼児期の運動に対する楽しさや肯定感が、その後の体力や運動習慣を左右することを意味している。また、園や学校において子どもの体力低下問題に対して解決策を見いだせていないということでもある。もし園や学校での取り組みが成功しているのであれば、底辺の底上げができ、二極化という程の現象は起きないはずだからである。その問題を解消していくためには、より低年齢から体を動かすことへの肯定感を身につけていく必要がある。それはつまり園でのリズム体操にほかならない。この幼少期は、何か運動ができるようになる得意よりも、体を動かすことが楽しいと思える好きを育てる身体活動に重点を置いて行っていく必要がある。その点リズム体操は、運動が嫌いな子どもでも楽しい気分になることができ、上手い下手関係なく行うことができる。しかし、園でのリズム体操の取り組みが減少していることで、運動を好きな子どもになかなか結び付いていかないのではないだろうか。多くの園で積極的にリズム体操を取り入れ、小さい子どもの時期に体を動かすことは楽しいという運動の肯定感につながれば、外遊びなどを日常的に行うよ

うになり、体力も向上していく。今回の研究により、早く昭和60年頃の最高の記録に戻していくためには、減少しつつある園でのリズム体操を盛んにしていくことが大切であることがわかった。

そのため、研究機関である保育者養成校ではリズム体操に力を入れていくことが求められる。保育現場で昔から行われている7つのリズム体操（No.1体操・エビカニクス・アンパンマンたいそう・たけのこ体操・いっとうしょう体操・はとぼっぼ体操・ラジオ体操）を学生たちに指導してだけでなく、それとは異なる新しいリズム体操についても積極的に取り入れたり、また体力向上につながるようなリズム体操を考案したりして、保育現場に提供していくことが求められている。そのような幼児体育指導者や保育者の養成を考えていく必要があることがわかった。

V. おわりに・謝辞

接骨院に立ち寄った際に、幼児～小学生低学年の子どもが何人かいるのを見た。私が中学時代に部活動でケガをして通院した際には一度も見たことがなかったため、子どもの体力低下が実際にこのような現象として起きているのだと、かなり強い印象として残っている。また中学校の部活動指導をしていた際に、選手の転び方が怖く、転ぶ練習をしたこともあった。小さい頃の運動習慣はのちの大怪我につながってしまう。単に体力向上ということだけでなく、身を守るためにも必要であると感じた。未来ある子どもたちに健康で安全に過ごしてもらうためにも、私たち幼児体育系の教員に課せられた任務の重要性を感じている。

お忙しい中、アンケートにご協力いただいた神奈川県横浜市にあるA専門学校でB短期大学の併修をしている学生、教職員及び関係者の皆様、また日本幼児体育学会においてポスター発表をした際にご意見やアドバイスをくださった方々に、心より御礼申し上げます。

引用文献・参考文献

- 1) 文部科学省：武道・ダンス必修化 http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/1330882.htm 2019.12.3 閲覧
- 2) スポーツ庁：平成20年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果 p.39-44、2009.1
- 3) コロンビアミュージックエンターテイメント：保存版！キッズたいそうベスト12 2006.4
- 4) 国立国会図書館：歴史的音源 <http://rekion.dl.ndl.go.jp/> 2019.12.16 閲覧
- 5) インディーズ・メーカー：エビカニクス、2007.9
- 6) うたてん：<https://utaten.com/> 2019.12.16 閲覧
- 7) オリコン：<https://www.oricon.co.jp/> 2019.12.16 閲覧
- 8) 廣田修平、菊地はるひ、是枝亮、大嶋莉奈：北海道における子どもの体力・運動能力向上のためのリズム体操開発の報告 北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター年報第8号 p.115-116、2018.3
- 9) スポーツ庁：平成30年度体力・運動能力調査結果の概要及び報告書について p.23、2019.10

